

和力 話力 第1回 輪力



ユーモアは、相手の肯定、人間の肯定

前群馬大学教授 高橋 俊三

子どもたちはすぐ笑う。笑うのが好きだ。
例えば、次の場面。何かの理由で、10人以上の挙手を数える場合、教師が、「では数えるよー。ワン、トゥー、スリー、……テン、じゅういち、じゅうに、じゅうさん、じゅうし、……」とやれば、必ずどっと笑いが来る。

また、これとは逆に、「では数えるよー。いち、にい、さん、しい、……じゅう、化ブン、トエル、サティン、……」とやれば、同じく、笑いが起こる。しかし、両者のその笑いは微妙に異なる。

いわば、前者がユーモア、後者がウィット。笑いは、「変化の中にある不本意的なもの」と言ったのはペルクソン。予想外の予期せぬ変化、しかも突然の変化が笑いを誘う。

英語の数え方が突然日本語に変わる。日本語の数え方が突然英語に変わる。予想を覆されるところに、笑いが生まれる。

でも、前者の反予想は、聞き手にとって安堵に落ち着く。「なあんだ、先生は、11以上は英語を知らないんだ。ぼくと同じだ。」「なあんだ、先生知らないんだ。私、知ってるよ。」と、同等の立場に降りていくか、もっと、それ以下の立場に降りるか、いずれにしても、聞き手は、話し手と同位ないしは優位に立ち、安心して笑う。

ところが、後者は、予想を覆されるのは、

同じだが、話し手にステップを1段階上げられてしまう。「お前ら、知ってるか。」「言えるか。」の挑戦に受けとめられかねない。聞き手は「なんだよ、知ったかぶって。」の反応となりかねない。

ユーモアは、同じ地平で、人間的な共感の笑いをいう。ウィットは、知的な笑いであり、時に人を切ることもある。ウィットもよいが、教室の子どもたちを救い、明るくするユーモアを考えよう。

ユーモアは、その場を明るくし、人と人との和を結び、その和の協力によって、新しい事と物とを創造する力を発揮する。

落語家が、本題に入る前の枕を振る段階で、自分を卑下したり、聞き手を煽てたりするのは、この地平の問題だ。何も、教師は卑下することはないが、偉ぶる必要もない。

「いやー、俊ちゃん、君がいてくれたかー。よかった。頼まれてよー」か。「えーと、誰かいないかなあ。うーん、俊ちゃんだけか。じゃあ、頼まれてよ」か。

ユーモアは、相手の存在を肯定する、人間的な、温かい笑いをいうのだ。

たかはし しゅんぞう 前群馬大学教授。ILEC言語教育文化研究所常務理事。NHKテレビ「話し方教室」「朗読入門」など企画出演。現在、「猫また」の45分授業で、小学生の笑いを呼ぶ授業に凝っている。